

る。学期や学年の終わりに返却するのであるが、返却後は学習に不要な物なので学校に持ってこないという約束をおこなっている。

特集
「ナイフ」
と
技術教育

ナイフをめぐるって考える

黒磯市の教師刺殺事件を皮切りに続出したナイフ事件の報道を目にするに付け、その論調に割り切れないものを持ち続けていた。直感的にこれはおかしいと思ったり、ナイフは排斥されなければならないものなのか、とか、でも危ないし人を傷つけるというのが、銃とはまったく違うのではないか、などと考えてきていた。手労研の集まりでも、ここで私たちが何かいわなければ、このナイフ排斥の風潮が定着してしまうおそれはないだろうか語り合ったりもした。

こんな思いでいたので、新聞、雑誌の関連記事にはできるだけ目を通すようにしてきた。とは言え、精読する余裕はなかったのだが、いくつか納得できる論調を目にすることができた。椎名誠は「日本は『ナイフの文化』の国ではないのではないかと指摘している(『凶書』岩波書店 1998.5)。世界を回っての指摘だろう。ちょっとしたことで人間の生活の根にあたるものを捨て去る風潮が表面に出ることに対する評価なのだろう。『諸君』6月号の「オレたちもナイフ少年だったぜ」(西木正明・東郷隆・藤沢周)も納得できる論議をしていた。

その中でも、私が教育とのかかわりで一層納得できたのは、芹沢俊介の「二つのナイフ事件を考える」(『中央公論』4月号スクランブル)である。全文を見ていただきたい思いが強いのだがそうもできない。見開き2ペー

製作の途中や製作後にも危険なおきていない。生活面の変化も常に留意している。(東京・調布市立神代中学校)

森 下 一 期

ジの短い評論の中に大事な視点が盛り込まれている。一、二を紹介しておきたい。芹沢は黒磯中の事件を、「生徒と教員の相互関係が作り上げたもの」と規定し、「生徒は教室だけでなく廊下でも一方的に言葉で責め立てられていた。『先生はなにか悪いことを言った?』と問われて『言わねえよ』と答えるしかないほど正義は教員の側が握っていた。一中略一生徒は教員の正義の言葉の平手打ちを立て続けにくらっていた、そんな感想を抱く。子どもの側に立ってみれば、キレて当然よ、と試してみたい。そして、これはありきたりの校内暴力で終わるはずの出来事であったのだ。ところが生徒はたまたまナイフを持っていた。この点がありふれた出来事で終わるはずのものをいっきよに不幸な事件へと飛躍させてしまった。ナイフは決して事件の本質ではないのである。」そして、警官襲撃事件との本質的な違いを記した後、「ナイフで人を殺せるという文章とナイフは人を殺すという文章とは異なる。こうした違いに対する認識がいま崩れかかっている。事件の後にはじまった生徒の持ち物検査やさらにはそれがナイフ狩りへと進展していく光景をみると、前者の意味が後者の意味へと取り込まれつつあるのを痛感する。」「大規模な暴力を生み出しかねない大人のこのようなキレた思考と較べるとき、子どもがキレることなど私には少しも怖くないのである。」

以上は、私が今回の論調の中で学んだことである。こういった紹介だけでは申し訳ないので、私なりに考えたことも記しておきたい。

（このような事態は、手労研ができたころのことを思い出させた。手労研を創設したのは、1973年のことだが、子どもたちのまわりから道具が消え、ものに働きかけること、工作することが無くなり、大人が働く姿を目の前にすることが無くなってきた頃である。私自身は、1969年から技術科の教師を始めていたのだが、70年におそらく日本で初めて小学校（和光小学校）の技術科を教えることとなり、子どもたちの道具経験、工作経験の欠如に危機感を覚えたからである。

そのような状況は、一つは「危険性」からつくりだされたものであった。1960年の浅沼社会党書記長の刺殺事件がきっかけとなっていると言われ、飛び出しナイフがはやったことへの対応としてナイフ追放の運動が起こった。鉛筆削り器が学校に持ち込まれたことがそれに拍車をかけた（メーカーが学校に寄付をしたといったようなことも聞いた）。

さて、現在は1990年代の末である。なんと30年ほど経過している。「ナイフ追放」を同じこととして見ていいのだろうか。

1960年代は高度経済成長の時代であった。それまで、第一次産業が40～50%を占めていたのに急激に減少し第二次産業が主要な位置を占めてきた時代である。第二次産業は使い捨ての消費文化をつくり出すことに貢献した。家庭の中で営まれていた生産を外に吸い出し、家庭は消費の場となったのである。つまり、「ナイフ追放」の声が無かったとしても、子どもたちはナイフを使わなければならない生活が存在しなくなっていたのである。重要なことは、そのことに危惧を覚えた人々が少なからずいたことである。確かに、「ナイフ追放」の声が出たとき、それに抗する動きが顕著に現れたとは言えない。しかし、そ

れを可能とする先に述べたような経済構造が進行する中で子どもたちの道具経験＝ものに直接働きかける実体験が極度に失われ、人々は危機感を覚えた。したがって、手労研が旗揚げし、新聞に取り上げられたときには、日に数十通の共感の手紙を受け取ったものである。会員は1、2年を経ずして千名を超えるといった勢いだった。多くの教育研究団体が手作りや実技を取り入れるようになったのはその後だと私は思っている。

1980年代の臨教審も情報化の陰の部分として子どもたちの原体験の欠如を問題としたりした。ある意味では「生活科」の新設もそういった危惧をベースにしているのだろう。

つまり、30年前は時間はかかったかも知れないが、子どもたちの生活に目を向けるきっかけとなっていたと思えるのである。

ところで、今回はどうだろうか。子どもたちも含めて親自身も刃物を生活の中で多様に使ったことのない世代となっている。ナイフ：刃物が生活と切り離せない道具であるという実感を得ていないだろう。そのような消費文化の中で生活を強いられてきているのである。したがって、近年の事件を目の前につきつけられると、ナイフを手にすることが異常なこととしてとらえられてしまうのではないだろうか。政策を牛耳っているものたちも、年はいっているかも知れないが、古い生活を早々と捨てて「現代的な生活」に乗り換えた人たちではないだろうか。日本の経済成長が基本とした「スクラップアンドビルド」はまさにそのようなものである。このように考えると、子どもたちにとってナイフは生活に欠かせない「道具」といったイメージや認識は極度に薄くなっているだろう。そういった中で「ナイフ狩り」を進めたならば、ますます子どもたちはものと切り離され、道具と疎遠になる。それを大人たちは良しとするのだろうか。ナイフそのものを身近にしてきた親たちは少ないかも知れないが、実体験が希薄になること

には危惧を覚えていると思う。「ナイフ狩り」は、それに拍車をかけることなのだ。

この場合は、技術教育といった視点から考察するところなのだろうが、そういった枠組みを超えたところで、子どもの生活を保障する

意味でも「ナイフ狩り」を許してはいけないのである。そういったキャンペーンを有効に展開するにはどうしたらよいか、頭を寄せ合って考えなければいけないときである。

(和光中学・高校／前手労研事務局長)

特集
「ナイフ」
と
技術教育

少年とナイフ

中川 淳

少年によるナイフ殺傷事件が頻発している。栃木県の女教師を中学生が刺し殺した事件は私に大きな衝撃を与えた。「遂にここまで来たか」という思いが胸に込み上げた。あの十数年前の学校の荒廃の中に身を置いた者なら誰でも「何時かは」という不安を抱いたのではないだろうか。

確かに、学校の荒れは治まり小康を保っていた。しかし、それは不安におびえた教師たちが管理という力で制度的にあるいは物理的に押さえ込んだ結果であるという苦い思いを抱きながら私は学校を去った。

「わかる授業、楽しい学校を」と子供が主人公になる学校づくりに精一杯の戦いを挑んできた。しかし、制度としての学校の存在の前に跳ね返される自分の実践ではなかったかとむなしさも抱いている。

一学級、一つの学年、一つの学校は変えられても現代の学校の競争主義や選別主義、行政による学校管理全体を改革しない限り学級づくりも学校づくりも一時的、部分的なものに過ぎなかったという悲哀を抱いたのは私だけであろうか。

せめてもの慰めは受験競争の荒波に揉まれながらも成長した子供たちが技術科の授業が楽しかった、学級が楽しかったと振り返ってくれることである。

さて、ナイフによる殺傷事件が連続すると「持ち物検査」をどう進めたらよいかというまったく対処療法的なことが議論の中心になってくる。子供たちがナイフを懐にしなければ不安だという子供社会の状況は、何に起因しているのかを真剣に見つめ直さなければ真の解決法は出てこないのではないか。大人さえも先行き不安な社会の状況、選別と競争主義の教育制度、個性重視といいながら横並びで安心する学校管理者、遊びや物を作ることを奪われた子供たち、「キレ」て当たり前な状況に子供たちが置かれているのではないだろうか。

ナイフ少年の存在は現代の子供たちの悲痛な叫びとして受けとめられないだろうか。

肥後守をポケットに野山を走り回った自分の少年時代を思い出すとき「俺のナイフは誰より切れる」と自分の研ぎ方ににんまりしたことが浮かんでくる。独楽を削り、竹ひごを割り鉛筆を削ったナイフはまさに子供の欠かせない道具であった。男の子なら誰でも持っているという肥後守であったが決して人刺すことには使わなかった。ナイフを道具として使いこなし、その性能を最もいい状態で維持管理することに子供ながらに誇りを抱いていたのである。人間と道異が良好な関係にあったのである。道具を手にすることで自分を啓